桜の咲かない春（前編）

今日くらり

【登場人物表】

○松下朝日（１８）…高校三年生。

○筧朝陽（３２）…高校教師。周・沙羅のクラスの副担任。担当教科は現代文。

○周コノハ（１７）…高校二年生。

○竹内（１８）…高校三年生。松下のクラスメイト。

○片淵沙羅（１７）…高校二年生。竹内の幼馴染・彼女。周のクラスメイト。

○三吉（１８）…高校三年生。松下・竹内のクラスメイト。

○父（５０）…松下の父。小説家。作家名は「月下真昼」。

○田畑（３５）…三年一組の担任。

○教頭（５２）

○教師１～３

○男子生徒1～6……三年一組の生徒。
○女子生徒1～6……三年一組の生徒。
○在校生1……卒業式の司会。

○　高校　教室

昼休み。

チャイムが鳴る。

生徒は机をくっつけて昼食の準備をしている。

黒板の隣に、卒業式までのカウントダウンが作られていて「残り14日」と書かれている。

○　同　職員室

松下、職員室のドアを開ける。

松下「失礼します」

松下、筧の元に向かう。

松下「あの」

筧「おお、来たか」

松下「用事って」

筧「ちょっと待ってよー」

筧、弁当の卵焼きを一口食べる。

松下「僕も昼食食べたいです」

筧「分かったって、すぐ終わるから。

あ、あった」

筧、「卒業生代表スピーチ」と書かれた紙を渡す。

松下、紙を受け取って眺める。

筧「松下に任せることにした」

松下「……なんでですか」

筧「俺が決めた」

松下「……こういうのって、学年で一番頭が良い人とか、体育大会でいい成績残した人とか、先生に気に入られた人がやるんじゃないですか」

筧「学年で一番頭が良い三吉には、勉強があるんでって断られた。あいつ推薦なんだろ？今勉強しなくたって良いのに」

松下「じゃあ」

筧「体育大会でMVP取った島本にも断られた。俺文才無いんでって」

松下「そんな理由で断って良いんです

か」

筧「まあ三吉も島本も、俺が誘いたかったわけじゃなくて、今まではこうしてたからって教頭に言われただけ。俺の気持ちも足りなかったかな。だから強いて言えば」

筧、松下を見つめる。

筧「俺に気に入られたから、お前がやる」

筧・松下、見つめ合う。

松下N「僕と先生の会話は、今日が初めてだった」

○　日替わり　教室

夕方。

教室には、松下・筧の二人だけ。

運動部の声や、吹奏楽の音が聞こえる。

筧、教卓の近くにパイプ椅子に座りながら原稿を読む。

松下、筧を見つめる。
松下「先生って国語の先生なんですか」
筧「（読みながら）ああ、うん。知らなかった？」
松下「はい。何年生の担任なんですか」
筧「二年。副担任だけど」
松下「ああ……通りで」
筧「通りで？」
松下「見たことないなって……」
筧、松下に原稿を返す。
筧「やり直し」
松下「は？」
筧「やり直し」
松下「……どこをどうとか、教えてもらわないと」
筧「お前らしくない」
松下「……僕のことなんて知らないでしょ」
筧「こんなのどこかで調べたら出てくるようなテンプレートじゃん」

松下「スピーチって、テンプレートで良いんじゃないですか」

筧「俺がどうしてお前に頼んだか分かるか？」

松下「分かりません。分かってたらこんなに悩んでません」

筧「お前らしいスピーチが聞きたいからだ」

松下「え？」

筧、教室から出ていく。

松下、驚きながら見送る。

○　日替わり　教室

休み時間。

松下、机に人差し指を打ち付けながら原稿を見ている。

竹内、歩いて松下の前の席に座る。

竹内「何してんの」

松下「んー、謎を解いてる」

竹内「それ楽しい？」

松下「微妙」

竹内「二人でやれば楽しいかもよ。どんな謎解きしてんの？」

松下「筧先生って知ってる？」

竹内「うん、二年の現代文だっけ」

松下「なんで知ってんの」

竹内「一個下に幼馴染がいるの。そいつの副担任」

松下「本当に副担任なんだ」

竹内「それで？」

松下「そいつに卒業生代表スピーチ頼まれた」

竹内「……え、謎解き始まってる？」

松下「成績差ほど良くないし、体育大会風邪引いて休んだのに」

竹内「そもそもなんで朝日のこと知ってるの？」

松下「それも謎。二年の知り合いなんて一人もいないし」

竹内「二年生の担当が卒業生代表選んで

良いんだ」

松下「それも謎なんだよ。あとさ……」

松下、原稿を見る。

松下「お前らしくないって言われた」

竹内「え？」

竹内、松下から原稿を取る。

竹内「卒業式のスピーチって自分らしさとか出すっけ」

松下「そんなの聞いたことないよ」

竹内「春の訪れが、とか、一番の思い出は、とか、今までお世話になった先生方に感謝、とかじゃないの。テンプレートがあって、個性が無いのが無いのが卒業式、ノーコメディなのが卒業式なんじゃないの」

松下「そうだと思うんだけど……」

竹内「（読み終わって）良い文章じゃん。俺が親なら頭撫でながら褒めるよ」

松下「お前が親じゃなくて良かった」
筧（声）「こっち回せー！」
松下・竹内、窓の外を見る。
筧、生徒とサッカーをしている。
竹内「教師も授業受けて良いんだっけ」
松下「駄目だろうね」
教師1「筧先生！何してるんですか！」
筧「あ、やば」
筧、走って逃げる。
竹内「駄目だったね」
松下「あの人って生徒に何か教えられるんだろうか」
竹内「聞いてみようか？どんな先生か」
松下「助かる。でももう時間が」
竹内「時間？」
松下・竹内、黒板の方を向く。
黒板の隣に、卒業式までのカウントダウンは「残り10日」と書かれている。
竹内「あと十日で卒業かー」

松下N「僕達はあと十日で、卒業する」

○　高校　玄関

松下、正門までの道を歩く。桜の木を通り、校舎裏への道を見て立ち止まる。

○　回想　高校　校舎裏

春。放課後。

T「一年前」

松下、正門までの道を歩くと、目の前に桜の木が立っている。

松下「桜、咲いてない」

松下、桜の木に近付くと、校舎裏への道を見えて立ち止まる。周が花壇を見つめているのを見つける。

整備されていない花壇は、全て四葉のクローバーで埋め尽くされている。

周、柵の前からしゃがんで花壇を見

ている。ゆっくりと倒れるように花壇の中に体を傾ける。

松下「え」

松下、走って助けに行く。

松下「大丈夫？」

周、振り向く。

周「踏んでる」

松下「え？」

周「踏んでる」

松下、足元を見つめる。アスファルトに飛び出して咲いている四葉のクローバーを踏んでいることに気付く。

松下「ああ……」

松下、足をずらす。

松下「何してるの」

周「四葉のクローバー見てるの」

松下「はあ……」

松下、周の隣にしゃがんで四葉のクローバーを見る。

周「ここ、四葉のクローバーしか無いの」

松下、辺りを見回すと、四葉のクローバーだらけ。

松下「本当だ」

周「知らないの？新入生？」

松下「いや、三年だけど」

周・松下、見つめ合う。

周「……すいません、でした」

松下「（小さく笑いながら）……二年生？」

周、頷く。

松下「いいよ気にしなくて。去年の秋に転校してきたんだ。こんな所あるなんて、気付かなかったな」

周「……四葉のクローバーがあるのはこだけなんです」

松下「そうなんだ」

周「去年までは皆それが面白くて、たくさんむしってはそれにしたり飾ったり

してたんです。ここも晴れの日はたくさん人がいました」

松下「へえ……」

閑散としている校舎裏。

周「夏って怪談話とかするじゃないですか。クラスの三人に一人は怖い話持ってるじゃないですか」

松下「そう、なんだ」

周「去年の夏、どこかのクラスで誰かが言ったんです。うちの校舎裏、四葉のクローバーがたくさんあるけど、あそこは死んだ人が埋まってるから弔いの意味らしいって」

松下「え……」

松下、一歩下がる。

周「噂って、身近であればあるほど興味を持たれるし広がるものなんですよ。本当か嘘かなんてどうでも良い。面白ければどんな話でも広がっていくわけです。だから今はこんな

感じ」

松下「嘘、なの？」

周「分かりませんけど、本当だとしたらもっと呪われてるはずだと思います。でもこの高校での怖い話なんて一つも聞いたこと無いし」

松下「……確かに」

周「人って薄情ですよね。今までは喜んでクローバーむしり取ってたのに、噂聞いてからはめっきり来ない。嘘か本当か分からない噂に惑わされて、本当の自分なんてどこにもいない。物事の本質は、偏見や噂に惑わされずに自分で確かめないといけないのに」

松下「本当の、自分」

松下、さっきまで踏んでいた四葉のクローバーを見つめる。

周「高二の秋に転校って大変ですね」

松下「あ、え？」

周「進路とか色々あるじゃないですか。二年の教室が冷え込んだら生徒達に進路希望調査を配らなきゃいけないって、先生言ってました」

松下「……寒さで判断してるんだ」

周「寒さで判断する人間も、噂で判断する人間もいるってことです」

周、立ち上がる。

松下「……転勤で」

周「え？」

松下「父親の転勤で、ここに来た」

周「……そうですか」

松下「って言えって、言われた」

周、松下を見つめる。

松下、立ち上がる。

松下「本当は、いじめられたから来た。兄貴が捕まったから」

周「お兄さん」

松下「でも何もしてない。冤罪だって母さんは言ってた。でも学校も、親

の職場も、兄貴の話で持ち切りで、本当の僕達を見てくれる場所じゃなくなった。だから遠いここに引っ越してきた」

周「……そう、ですか」

松下「いじめられたとか、自分の兄弟のせいだとかそういうの言ったらなんか、皆の目が変わるっていうか。小さい町だったから、兄貴が逮捕されてすぐに皆の目が変わったんだ。大嫌いなものを見る時の目、怖いものを見る時の目、気味が悪いものを見る時の目。とても人間を見る目じゃなくなってた。人間じゃなくなったのかと思った。人が、怖くなった。だから父親の仕事の事情で、って言って

た」

周「……私には、言って良いんですか」

松下「……君は、噂じゃなくて本当を理

解してくれる気がしたから。違った、かな」

周、首を横に振る。

周「信じますよ。お兄さんが冤罪ってことも、いじめられたからここに来たってことも、先輩のことも」

周、笑う。

松下N「正門近くの桜の木には、花が咲いていなかった。彼女と会った、初めての日だ」

○　高校　校舎裏

松下、周がいない花壇を見つめる。

筧、校舎に隠れながら花壇を見つめる松下を見つめる。

○　同　教室

夕方。

「残り7日」と書かれたカレンダー。

筧、原稿を読んでいる。

松下「先生」

筧「（読みながら）んー？」

松下「先生はどうして僕のことを知ってたんですか」

筧「先生だから学校全員の名前と顔把握してる」

松下「嘘だ」

筧「嘘じゃねーし」

筧、原稿を返す。

松下「え、またですか」

筧、窓を開けてグラウンドを見る。サッカー部がグラウンドで試合をしている。

松下、窓からグラウンドを見る。

筧「今ボール持ったあいつは池田智也。一年なんだけど、めちゃくちゃプレイ上手くてスタメンに入った」

松下「へえ」

筧「（指を差しながら）靴が蛍光ピンクの

奴。あいつは河野蓮。中学まではサッカーチームにいたんだって。期待の星って呼ばれてる」

松下「先生」

筧「で、あいつは」

松下「先生」

筧「なんだよ」

松下「この前の体育の時間、生徒に紛れてサッカーしてましたよね」

筧「あ」

松下「その時覚えたんでしょ」

筧「……たまたまよ。他の生徒だって名前分かるし」

松下「嘘」

筧「嘘じゃねーし！じゃあ今から体育館行ってバスケ部一人一人名前当ててやるよ、来い！」

松下「先生」

筧「なんだよ、本当だって」

松下「周って、分かりますか」

筧「……」
松下「苗字か名前かは、分からないんですけど」
筧「は？」
松下「本人がそれしか言わないので」
筧「……周コノハは俺のクラス。だから分かるよ」
松下「周、コノハ」
筧「周と知り合いなのか」
松下「知り合いって、なんですかね」
筧「は？」
松下「どこからどこまでが知ってるに入りますかね。話したことないけど廊下で見かける他のクラスメイトはどうですか。一年生の学年主任の先生は、廊下で会ったら挨拶します。竹内の先輩は、全く知らないけど会ったらお辞儀をします。
筧先生は、会ったことなかったけどスピーチを頼まれました。どれ

が、知り合いですか」
筧「周に会ったことはあるか」
松下「はい」
筧「話は」
松下「しました」
筧「挨拶程度か」
松下「いや、数分話しました。校舎裏の花壇で、四葉のクローバーが咲いていることを教えてくれました」
筧「それから？」
筧、席に座る。
松下「花壇にあまり人が来なくなったこと、物事の本質は、偏見や噂に惑わされずに自分で確かめないといけないことを教えてくれました」
筧「お前は何を話した」
松下「僕は……自分の家族の話をしました」
筧「そうか」
松下「……あの」

筧「世の中は偏見や決めつけで溢れている。偏見を持ってはいけないだの、多様性を認める時代だの言われているが、それは偏見が無いように見せているだけ、人は隠れて他人のことを決めつけるんだ。松下」

松下「はい」

筧「周のことを、なんだと思った」

松下「……はい？」

筧「お前が呼びたい関係性が、お前の思う、周とお前の距離だ」

松下「……分かりません」

筧、立ち上がり教室のドアに手を掛ける。

松下「先生、これ」

筧「あと一週間しか無いんだぞ？ちゃんと書け」

松下「だからどこを直せば」

ドアが閉まる。

○　日替わり　高校　教室

昼休み。

「残り５日」と書かれたカレンダー。

松下・竹内、机を合わせて菓子パンを食べている。

竹内「あのさ」

松下「んー？」

竹内「俺分かった。筧が朝日のこと指名した理由」

松下「え？」

竹内「同じ名前だからじゃん？」

松下「……え？」

竹内「お前知らないの？先生の名前」

松下「筧……」

竹内「朝陽。筧朝陽って言うの。先生のフルネーム」

松下「そうなんだ」

松下、竹内を見る。

竹内、微笑みながら松下を見る。

松下「何？」

竹内「何ってなんだよ。同じ名前だから親近感持ってスピーチ頼んだってこと。真相突き止めてやったじゃん」

松下「名前が一緒なだけでスピーチ頼まないし。それに筧先生が指名出来る理由も分からないままだし」

竹内「それはそうだけどさー。あ」

竹内、スマホを操作する。

竹内「筧のこと聞いてみたよ。沙羅が送ってくれて」

松下「……沙羅？」

竹内「うん。筧先生は」

松下「沙羅って、あの？」

竹内「……あの、とは」

松下「竹内の彼女の、沙羅ちゃん？」

竹内「そうだよ。彼女の沙羅」

松下「告白出来なくてどうしようって」

竹内「年末お前に電話したやつ、懐かし

いな。でさ」
松下「幼馴染って言ってたじゃん」
竹内「え？」
松下「幼馴染に筧先生のこと聞いてみるって言ってたじゃん」
竹内「沙羅は幼馴染だよ。幼馴染で、彼女だよ」
松下「彼女って呼ぶだろ普通」
竹内「どっちでも良いだろ」
松下「いや良くないだろ」
竹内「なんで？」
松下「なんでって……なんでだろ」
竹内「沙羅も俺のことクラスメイトに話す時は、彼氏やら幼馴染やら一つ上の先輩って言ってるみたいだし」
松下「そう、なの」
竹内「うん。生まれてから幼馴染なんだし、沙羅は沙羅だし。関係性とか肩書とか、相手を目の前にしたら

あんまり意味ないだろ。名前なんかより、一緒に話してて楽しいかとか、弁当食べて美味しいと思うかとか、一緒に帰りたくて二年の教室に行きたいかの方が大事だって」

松下「そういうもんなんだ……」

竹内「そういうもんだよ。でさ、筧なんだけど」

松下「そういうもん、なんだ……」

松下、窓の外を眺める。

竹内、ため息をついてスマホ画面を見る。

竹内「筧先生は基本的には静かな人だよ。いつも本を読んでて、誰かがうるさくしたら一言言うくらい。大体担任に任せて自由に生活してるイメージかな」

松下、竹内を見る。

竹内「でも二年生は皆、筧先生のこと大

好きだよ。少なくとも、うちのクラスは全員。（声色を変えて）え、なんで？」

松下「え、何急に」

竹内「あ、俺の返信ね。メッセージそのまま読んでるから」

松下「ああ、うん」

竹内「あんまり人に興味が無さそうに見えるけど、先生は生徒のことよく見てくれる人なの。授業は本当に面白いし、放課後は生徒とサッカーしたりバスケしたりしてる。この前の家庭科の授業なんて、先生の目盗んで家庭科室に入って、うちの料理一口食べてったの。美味いって笑った顔が本当に格好良くて……は？何これ。どういう意味」

松下、竹内のスマホを奪う。

竹内「ちょっと」

松下、画面を見る。

沙羅（声）「それに、うちのクラスに不登校の子がいるんだけど、その子の家にプリント届けたり、話聞いたりしてるみたい。生徒思いの良い先生だよ」

松下、スマホを操作して「その子、名前なんて言うの？」と打って送信する。

竹内「お前馬鹿！」

竹内、松下からスマホを取り上げて画面を見る。

竹内「あ」

松下、画面を見る。

松下のメッセージに既読がついて「周コノハさんって女の子だよ」と返信が届いている。

松下「周、コノハ……」

竹内「え……？」

チャイムが鳴る。

○　回想はじめ　校舎裏

松下、正門までの道を歩く。途中で校舎裏への道を見えて立ち止まる。周が花壇の前にあるベンチに座っているのを見つける。

松下「あ」

周、松下に気付き微笑む。

松下、近付く。

松下「何してるの？」

周「本読んでたんです。でも今は、休憩」

松下「何の本？」

周、隣に置いていた本を見せる。作者は「月下真昼」。

松下、本を見つめる。

周「知ってますか？」

松下「知ってるっていうか……友達が、持ってたなって」

周「友達……。そうですか」

周、空を見上げる。

松下、同じように空を見上げる。

松下「何か飛んでる？」

周「何も」

松下「雲が何かの形に似てるとか」

周「雲一つないですね。今日はいい天気です」

松下「じゃあ、何のために見てるの？」

周「なんのためでも無いです。なんもないから見てるんです。意味のないものを見ることに、意味があるんです」

松下「意味のないことに、意味がある……」

周「失読症って分かりますか」

松下、周を見る。

周「文字を読むことが困難になる脳の病気です。去年の春に倒れてからずっと、文字を見ると視界が歪むという

か」

松下「文章が読めないってこと？」

周「少しだけなら読めます。現代文の教科書、一ページの半分くらい。でもそこからは文字がいなくなったりぼやけたりして見ることも辛くなります。でもこうして数分休憩したらまた読むことが出来ます」

松下「人の顔は分かる？」

周「え？」

周、顔を上げる。

松下「僕、この前もここに来て君に会ったんだけど、顔、見えてた？」

周、笑う。

松下「え」

周「顔の判別は出来ます。覚えてます、もちろん」

松下「あ……良かった」

周「転校生の先輩、ですよね」

松下「あ、名前」

周「無理して言わなくても良いですよ」
松下「いや、松下朝日って言います。漢字は（スマホを操作して）……あ」
周「休憩したんで読めます」
松下「……これ」
松下、スマホを操作して画面を見せる。
周、画面を見るために松下に近寄る。
松下「見せるほど、変わった漢字使ってなかった」
周「朝日って、良い名前ですね」
松下「そうかな、ありがとう。君は」
周「私、本好きなんです」
松下「……うん」
周「物語は必ず誰かが作っている。誰かの経験や考えから、人を感動させるストーリーが出来上がっている。素敵だと思いませんか」

松下「そうだね」

周「特に月下先生の作品はいつも私の近くにいてくれました。上手く説明出来ないけど、心が空っぽになってしまった時、先生の本を読むと、心が何かで満たされるんです。優しさや温かさ、体中がじんわりと何かに包まれている感覚です。とても心地よかった。でも今は出来ない。癒しを求めていた読書を、一生懸命にやっている自分がいます。大好きな本が読めなくて、文章が、文字が分からなくなって、好きな物を否定されている感じがしました。好きな物を好きって言ってはいけないと言われているようで。でもどうしても、本が好きな私を捨てることが出来ないんです」

周、本を抱き締める。

松下「捨てなくていい」

周「え？」

松下「好きな物を、自分を捨てなくたっていい。好きな物は好き、嫌いな物は嫌いって言っていい。好きな物を嫌いだって投げ捨てそうになったら、僕が受け止めて好きにして戻すよ」

周「……どうやって」

松下「どうやって……？」

周、笑う。

松下「あ、君が読みたい本がどんな内容なのかを君に伝えるよ。僕が読んで君に伝える。聞くだけなら疲れないし、物語の中に入っていけるはずだから。この本がどんな展開で主人公がどう動いていくか、伝えるよ」

周「でも私の為にこれを読んでもらうのは申し訳ないです。時間も取られるだろうし」

松下「大丈夫。その本の内容知ってるから」

周「……読んだんですか」

松下「え？あ、うん」

周「さっき友達が持ってたって」

松下「……借りた、借りたんだよ。友達もその人のファンでさ、全部持ってるから」

周「大ファンなんですね」

松下「ああ、どうかな」

周、立ち上がる。

周「私、月下先生の本全部読みたいです。朝日さんの声で、話を読みたいです」

松下「……分かった。あ、あのさ」

周、首を傾げる。

松下「名前、教えてくれないかな」

周「……周です」

松下「あまね……」

○　回想　日替わり　校舎裏

松下・周、ベンチに座っている。

松下「その時、後ろを振り返ったらあいつがいて」

周「主人公の好きな人」

松下「そう。後ろから手を重ねて、僕はまだ君を忘れられないって」

周、息を呑む。

松下「そして二人は式場から逃げ出すんだ」

周「……それで？」

松下「前編はここまでで終わり。前編中編後編あるから」

周「ええ、まだ続きがあるんですね」

松下「うん。中編はもうすぐ発売されるから」

周「え？」

松下「……あ、まあ大体、これくらいのスパンが空いたら続編出るでしょ、多分、きっと」

周「詳しいんですね」

松下「まあ、僕も本好きだから」

周「朝日さんが物語を話してくれると、本を読めていた時よりももっと物語にのめり込んでいる気がします。楽しいです」

松下「そっか。それは良かった」

周「でも良いんですか？」

松下「何が？」

周「受験勉強です。三年の夏は勝負の年だって先生が言ってましたよ」

松下「ああ、良いの。もう進路決まってるから」

周「そうなんですか」

松下「シナリオスクールに行くんだ」

周「シナリオ、スクール」

松下「脚本家になりたくて、劇団のスタッフやりながら学校に通うつもり。願書も取り寄せたし、面接と少しの学力テストがあるくらいだ

から、勉強はもう良いんだ」

周「朝日さんにピッタリです」

松下「え、そうかな」

周「朝日さんには、人に何かを伝える才能があります。本自体も面白いけど、朝日さんの伝える力があるから、楽しく聞いていられるんです」

松下「……ありがとう」

周「応援してます」

松下「……あのさ、これ」

松下、スマホの画面を周に見せる。

周「花火大会」

松下「友達が花火が一番綺麗に見える場所知ってるんだって。そいつは当日出店の見張りだから行ってみて って、教えてくれて」

周、スマホを見つめる。

松下「……あ、ごめん嫌だったら」

周「行きたいです。花火大会。朝日さんと」

周、松下を見る。

○　回想　山奥にある神社　階段

夜。

松下・周、神社の階段を上る。

周、階段の途中で立ち止まり息を整える。

松下、数段降りて周の近くに行く。

松下「大丈夫？」

周「……久しぶりの運動だったので」

松下「もう少し、付き合ってくれる？」

周、頷く。

松下、微笑んで周の手を握る。

周、驚きながらも松下と共に階段を上る。

○　回想終わり　同　裏

松下・周、手を繋いでいる。

松下「あった」

広々とした空地に、二人掛けのベン

チが置かれている。下には出店の明かりや、賑わう人だかりが見える。

松下「これはよく見えそう」

周「お友達、すごいですね」

松下「生まれた時からここに住んでるんだって。この町は俺の庭だって言ってた」

周、笑う。

＊＊＊

松下・周、手を繋いだままベンチに座っている。

周「なんだか不思議ですね」

松下「何が？」

周「（下を見て）さっきまであっちにいたのに、今はこんな暗い所に二人でいて。二人だけの世界にいるみたい」

松下「二人だけの、世界」

周「ああでも、学校でも二人ですね。四

葉のクローバーは誰も見に来ないし」

松下「……うん」

周「朝日さんが来てくれて、良かった」

松下、周を見る。

周「文字が読めなくなって、悲しいと思う時間が増えました。でも朝日さんと会ってからは、笑う時間が増えた気がします」

下からカウントダウンが聞こえる。

松下、周を見つめる。

周「始まりますね」

松下「……うん」

松下・周、花火が上がる正面を見る。

ゼロと聞こえた瞬間に大きな花火が打ちあがる。

周「わあ……」

松下「すご……」

続々と花火が打ちあがる。

周「綺麗」

松下「ね」

松下、周を見つめる。

周、松下からの視線に気付く。

周「ん？」

松下「好きだ」

花火の音に隠れて聞こえない。

周「んー？」

松下、笑って周を抱き締める。

周の瞳に花火が写る。

続